

2015. 5. 7 (木)

関学レインボーウィークとキャンパスライフ

飯塚 諒

関学レインボーウィークのお知らせ

本日は皆さんにチャペルでお話できることを、うれしく思います。今回は、関学レインボーウィークが来週から始まるのでそれについての広報と、あとは自分の話を少ししたいと思います。どうぞよろしくお祈りします。来週5月11日から15日まで関学レインボーウィークが開催されます。「関学レインボーウィークとはいったいどのようなものか」。これは、性的マイノリティ（性的少数者）の人の理解を深める期間として設けられました。5月11日にオープニングイベントをします。そして、レインボーウィークの間中は図書館でパネル展示をしたり、12日には映画の上映会をする予定です。レインボーウィーク期間中は、正門の前に、虹色の旗が立てられます。その虹の旗には意味がありまして「多様性」を象徴するシンボルなのです。虹は7色あると日本でいわれていますが、性的マイノリティは6色（赤・橙・黄・緑・青・紫）を使って表現されています。レインボーウィークは今年で3回目になります。

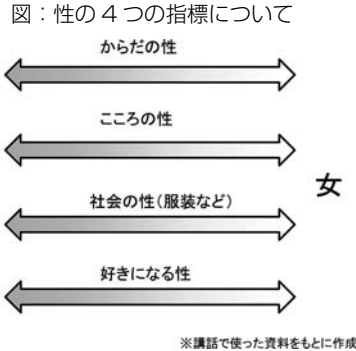
ちょっと遅くなりましたが、自己紹介をしたいと思います。僕は大学院生で、学部が別の方もいらっしゃると思うのですが、皆さん

と一緒に社会学部にいました。今は聴覚障害者の研究をしています。そして自身がゲイとしてアイデンティファイ（identify）しています。「性的マイノリティって、いったい何？」という方もいらっしゃると思うので、ここで簡単に説明させていただきます。

性的マイノリティは一般的にLGBTと言われることがあります。LGBTとはLがレズビアン（Lesbian）、Gがゲイ（Gay）、Bがバイセクシャル（Bisexual）、Tがトランスジェンダー（Transgender）で、これらの頭文字をとったものです。レズビアンというのは、自分が女性だと思って女性の人を好きになる人、ゲイというのはメディアでもよく出ていますが、自分が男性だと思って男性を好きになる人です。バイセクシャルは女性を好きになることもあるし男性を好きになることもある人で、自分の性別をどう捉えているかということはありません。トランスジェンダーというのは、自分を捉える性別と、身体的な性別が違う人を指します。LGBTとひとくくりにはされていますが、これ以外にもセクシュアリティというのは多様にあるといわれています。

性の4つの指標について

先ほど「セクシュアリティはいろいろある」と言いましたが、今考えられているものとして4つの指標があります。これは、セクシュアリティ（性のあり方）を説明する際によく使われているもので、性別を「身体的性別」「心の性別」「社会的性別」「好きになる性別」の4つに分けて、それぞれ男と女の二項対立ではなく、グラデーションとして位置づける考え方です。男ならまるきり男とか、女なら女というふうに、性別を2つのみに分けるのではなく、このように男と女のグラデーションの中に連続的に人々のセクシュアリティがある、そしてこれが揺れ動くものだという考え方がされています。該当する範囲も広がりがあります。



例えば A さんの場合はこのように書きます。身体的性別が女性で、心の性別も女性、社会的な性別、振る舞い、動作なども女性らしくて、好きになる性が男性だという場合があります。これは大多数の方なのですが異性愛者とか、あとはトランスジェンダーではない人のことをシスジェンダーという言い方をしますが、そのようなカテゴリになります。

別の B さんの場合です。身体的性別が男性で、心の性別が女性、好きになる性別が男性だという場合は、広義のカテゴリで言うとトランスジェンダーです。身体的性別が男性で、心の性別が女性だということに違いがあるということでトランスジェンダーにカテゴリライズされています。

次に C さんのように、身体的性別が男性で、心の性別、自分が思う性別も男で、好きになる性別も男性だという場合は、カテゴリで言うとゲイとなります。

このように、一人一人違うように、セクシュアリティも違うのだという話に終始するのですが、その人が LGBT（性的マイノリティ）かどうかということは、見た目や服装、仕草、言葉遣いでは分からない現状があります。先ほど言ったように性的マイノリティは LGBT だけではなく、例えば、A セクシャル (asexual) という、恋愛感情を抱かないというセクシュアリティが存在したり、あるいは、男か女かという性別で自分をくくらない、広い意味でエックスジェンダー (X-gender) という人たちもいらっしゃいます。

ここまでの話は、セクシュアリティの講義を取っていただければ、さらに理解が深まると思います。今回、お招き頂いたことを機に、もう少し実生活に引きつけた話をしたいと思います。皆さんの中にも、例えば友達からカミングアウトを受けたとか、友達にゲイやレズビアンがいるという方もいらっしゃるかもしれませんが、今回は僕が学部生だった頃の話をしします。

私が学部生の頃

僕は学部生の頃、宗教総部に所属していました。皆さんご存じですか。献血の推進活動や、千川キャンプでリーダー活動をしている部活です。そこに僕は4年間、献血に関する活動を行う献血実行委員会にいました。このようにチャペルで皆さんの前でお話するのは、今回が多分3回目ぐらいです。今までは献血実行委員会の献血推進のために来ていたのですが、今回はセクシュアリティの話をするということで、初の試みでとても緊張しています。

学部生の頃の僕は、男性に惹かれるということがあったのですが、この感情は憧れの感情なのだと思っていました。自分がゲイだと思っははいませんでした。メディアなどでよく見るように、ゲイというのはもう少し女言葉を使うような、オネエの人がゲイなのかかなと思っていたので、自分はそれとは違うという感じがしていました。自分がゲイだとは思っていないので、何か違和感があり、男に惹かれるということは薄々感じているのですが、それが何なのか分からない状態がありました。「いったい普通って何なのだろう」とすごく悩んでいました。それが、僕が学部生の頃です。

学部生活の中にも、ホモネタと言われるような、セクシュアリティをちょっとからかうネタというものが結構ありました。今は違うと思いますが、当時、例えば献血の推進をしていて、献血にきたことがある人なら分かると思いますが、献血をするための基準（条件）に、「不特定多数の異性と性的接触をしたか」とか「同性同士の性的接触をしたか」というものを、献血に来てもらった人に確認

してもらいます。その時に「おまえ、同性同士の性的接触あるんじゃないかね？ヤバいな（笑）」みたいな話を友達同士で普通にされたりします。また、部活中に男同士で仲良くしていると、僕ではなかったとしても、その人達に対して「おまえら、ゲイなん？」みたいに笑ったり、女らしいしぐさをする人に対して、「ホモかよ」みたいに決め付けや、なじりをするがありました。

実際にセクシュアリティというのはセンシティブな話になる場合があり、自分がゲイだとカミングアウトするということなどは、今の社会ではなかなか難しい状況です。その中で「ゲイなのか」と直接聞かれても答えにくいこともあります。

この他にも、友達とのゼミの話なのですが、授業中に海外留学の話があって、先生から「海外は気を付けなよ、掘られるから」みたいなことを言われたそうです。海外にはゲイが多いから襲われるというようなイメージがついているのでしょうか。また、自分の連絡先を気軽に渡すと、「そんなことはゲイじゃないよ」みたいな話をして、襲うなどの行為や不特定多数の人に連絡先を渡す行為が、なぜかゲイと結び付けられて語られたりもします。

日常的にホモネタでからかう環境で育つと、自分がゲイだと表明する時に、相手は「そんな違和感ないよ」と言ってくれても、本当にどう思っているの分からないというような疑心暗鬼な気持ちになることもあります。さらに、もし言ったら拒まれるのではないかという不安が日に日に募っていきますよね。

退部した友人からのカミングアウト

またこのような話があります。僕と一緒に部活をしていた子が途中で退部しました。卒業した後、その人から「やめた理由を説明したい」と西宮北口駅最寄りの居酒屋に呼び出されました。その人がゲイであるというカミングアウトを受けた上で、関学にはなかったセクシュアルマイノリティのサークルを立ち上げるために退部したという話を聞きました。

実際にカミングアウトされた時は、携帯に「自分はゲイです」と文章で打って見せられました。その時に「あっ、目の前にオネエじゃないけどもゲイはいるんだ。こういうゲイもあっていいんだ」ということに自分は気付きました。自分の何かモヤモヤとしていたものがちょっと解けて「こんなゲイの人がいいんだな」というふうに思いました。そして「自分もそうなんじゃないか」と思うようになりました。僕は以前に、その人に部内で相談を受けることがありましたが、ホモネタが横行していたのも退部した理由ではないのかなと、そのとき推測しました。

受け手とのズレ

実際にはセクシュアルマイノリティは全然いないのではないかとすると、そうではなくて、2013年の電通総研の調べでは、現在はLGBTの人は全人口の5.2%いるとされています。そのうち、アメリカの調査では、同性を好きになるゲイなどは20~30人に1人ということで、クラスに1人ぐらいはいるという割合です。ですから皆さん、今までLGBTの人とは会ったことがないと思っ

ている人もいるかもしれませんが、実際には会っていても、その人からLGBTだということ、カミングアウトを受けていないという状況があります。

「それならばさっさとカミングアウトすればいいじゃないか」と思うかもしれませんが、実際にはなかなか言えない状況がどうしてもあります。「もし拒まれたらどうしよう」とか、大事に思っている人ほど「言った時に関係が切れちゃったらどうしよう」と思うこともあります。

自分はカミングアウトというものは結構一方的な行為だと思っています。自分がカミングアウトすると、相手がすごく忌避感のある人で、僕個人のことは好きだけど、ゲイはどうしても理解できないという人という場合、これ以上付き合えないようなことになってしまいます。ですから、相手にカミングアウトすることは、実際には「相手を傷つけたらどうしよう」とか「相手の関係が悪くなったらどうしよう」というような、配慮の気持ちがあるとしてもついてまわります。

このように、異性愛者が大多数を占める中で、例えば「異性愛者が普通なのだ、自然なのだ。」と思われる風潮がどうしてもあります。そのようなことが前提とされているので、初対面の人からみると、僕はゲイだと思われなくて、異性愛者として扱われたりします。知り合いが増えていっても、自分のことをゲイであると理解してくれる人は、カミングアウトをしない限りいないままです。僕の場合は、「カミングアウトをできる人がどこにいるのだろうか」「どのような人にカミングアウトしていいのだろうか」と、考える日々が恒常的に続いてしまうのです。そのように気を遣ってしまう状況があります。

私たちにできること

これは、マイノリティだけが頑張ってもなかなかどうしようもない問題ですが、社会的な目で見ると、私たちにできることがあると思います。

例えば自分から、カミングアウトできそうな人をどんどん探すだけではなく、受ける側が「自分は性的マイノリティやセクシュアリティに対して全然忌避感がないよ」ということを表現する方向性があればいいのと思います。今、関学のキャンパスライフでもホモネタというものが結構ありふれていると思います。自分では思っていないでも、ホモネタにノリで便乗しているということもあります。当事者がそのような場に遭遇すると、どうしても相談やカミングアウトを、その人にできないという状況をつくってしまいます。このように、ホモネタの便乗は、相談やカミングアウトの可能性を遮る行為になります。カミングアウトするということは、その人をすごく信用して、決死の思いでやっている場合が多いです。ですから、ないがしろにするのではなく、きちんと、真摯（しんし）に受けとめてほしいと思います。関学のレインボーウィークでは、「多様性」ということを大事にしている。「違いというものを尊び、互いに価値を認める環境をつくるために、セクシュアルマイノリティや宗教や人種

などを問わずに皆が学べる共同体をつくらう」ということで始まりました。「LGBTがオッケーだよ」とみんなにワットと主張していくのはとても大変なので、中道先生も付けていらっしゃる、レインボーウィークのステッカーを付けていただくと「LGBTに対して理解があるんだな」という私たちにとってオッケーのサインでもあるように思います。このように、自分たちのできることはまだまだあるなと思います。

マイノリティというのは性的マイノリティだけではなくありません。いろいろなマイノリティの人がいます。マイノリティというのは、数が少ないということだけではなく、社会的に不利な状況にさせられている人のことです。今聞いてくださっている方の中にも何かしらのマイノリティを持っている方も多いと思います。そのように、性的マイノリティだけではなく他のマイノリティもいて、マジョリティ側から何か働き掛けというものが必要になってくる状況にあるということ、常に念頭において自分もかかわる必要があると思います。ということで、今回、自分の話を交えて話しました。来週から関学レインボーウィークがありますので、ぜひ皆さんもイベントに参加してみてください。ありがとうございました。

(大学院社会学研究科博士課程後期課程)